

韻書から見る明代標準語
——人口移動にも注目して

総合科学研究科総合文化学専攻
グローバル文化発信プログラム
余 仁偉

明代では人口移動、軍隊駐屯、南北交流の活発化などの要因により、その言語体系は複雑である。この複雑さは主に二つの点に現れている。一つは明代には人口移動などにより各地の方言が融合し、混在している可能性があることである。二つは明代の韻書資料は数多く、これらの韻書資料に記載されている音韻体系は同じではない。そのような中で、朝廷により『洪武正韻』が公的な韻書として編纂されたがその音韻体系は普及しなかった。以上の二つの点により、明代において公用された標準音韻体系を明らかにすることは困難である。

明代標準語を考える上で、その基礎方言の特定は現代音韻学者が研究している重要な課題である。現代の音韻学者は明代諸韻書及び当時の歴史的な背景を研究し、現代の音韻学者は明代標準語の基礎方言について北京方言説、南京方言説、中州方言説、安徽方言説という四つの説を提示した。そのうち、北京方言説の根拠は歴史上北京は元、明、清三朝の首都であったため、北京語が明代官話の基礎方言であると考えられるものである。南京方言説については明代初期に南京が首都と定められ、南京方言の優位が確立された。明成祖永楽皇帝の遷都に伴い、多くの南京人が北京へ移動したことにより、南京方言が北京に根付いた。そのため、南京方言が明代官話の基礎方言だと考える。中州方言説は一部の音韻学者の元明から清代中期まで漢語共通語の標準音は中州音であり、清代中期に至って北京語が漢民族標準語になったという考えに基づいて成り立っている。安徽方言説の根拠は主に明代初代皇帝朱元璋の本籍が安徽鳳陽であることに基づく。

これらの諸説に対し、本論文では明代の『洪武正韻』、『韻略易通』、『西儒耳目資』という三つの韻書の音韻体系を研究し、明代標準語が形成された時期である明代初期の人口移動状況を分析し、明代標準語の基礎方言を明らかにすることを目的とした。『洪武正韻』は当時の現実語音の影響を受け、古い語音と当時の現実語音が混在した特徴があり、朝廷により編纂された公的な韻書として名義上の標準語韻書という地位を占めていたが、実際には当時の現実語音を反映することができなかった。『韻略易通』は教科書のような漢字の発音及び意味を学習者に教えるための韻書であり、当時の北方、中原地方の言語体系を反映した。『西儒耳目資』はイエズス会宣教師ニコラ・トリゴーにより編纂されたローマ字で漢字を注音する韻書である。宣教師が宣教をするために習ったのは必然的に標準の中国語であると考えられることから、『西儒耳目資』は明代標準語を反映した韻書と見られる。

『洪武正韻』、『韻略易通』、『西儒耳目資』という三つの韻書が完成した時期は異なり、音韻体系にも様々な差異がある。しかし、三つの韻書の共通点は差異より多い。そのうち、三つの韻書の共通的特徴としていずれも入声があり、声母では無声歯茎摩擦音声母 ts 、 ts^h 、 s と反り舌音声母 $tʂ$ (或いは舌面音声母 $tɕ$)、 $tʂ^h$ (或いは舌面音声母 $tɕ^h$)、 $ʃ$ (或いは舌面音声母 $ç$) の対立があるということが挙げられ、これらが明代標準語の中心的な特徴であると考えられる。このような特徴は主に北方系方言に存在しているものであり、明代初期の人口移動に対する研究を通して、南方系方言が明代標準語の成り立ちに与えた影響はほとんどないということが分

かる。以上のことから、明代標準語は北方系方言を基礎とすると考えられる。三つの韻書の音韻体系の差異を見ると明代標準語の音韻体系は変化しないものではなく、時代により標準語も様々な変化の段階を経たと考えられる。

本文では明代標準語を明代前期官話、明代中期官話と明代後期官話に分ける。明代前期官話は明代標準語の形成初期の様子を示している。この時期には南京が首都として南京語の地位は高いと見られ、『洪武正韻』の序文にも「韻学は江左に由来し、正音が失われた。」という記載がある。それを見ると、明代前期官話の基礎は南京方言を中心とした江淮方言であるかもしれない。明代中期官話の基礎は中原地方の方言を中心とする可能性が高い。明代中期の韻書『韻略易通』に反映した音韻体系は明代後期に西洋宣教師が編纂した『西儒耳目資』の音韻体系との共通点は非常に多く、『韻略易通』に反映したのは明代中期の口語標準語であると考えられる。作者である蘭茂の本籍を考えると、この韻書は中原方言及び北方諸言語の共通特徴を反映したものであり。明代後期には農民の蜂起及び自然災害などの原因により、各地の自由な人口移動が非常に多い。韻書からは、明代後期官話は依然として北方系方言を基礎としたが、前期官話と中期官話より複雑であることが分かる。そのようなことから、明代後期官話は多地方の方言の混合体である可能性がある。